東京学芸大学教育実践研究　第17集　pp. 41-46，2021

教員養成大学の授業に対する学生の抱く「リアリティショック」について

―― 初年次の入学直後期・後半期における調査報告 ――

堀越　麻帆*・橋本　創一**・芝嵜　日夏子**・李　受眞**・熊谷　亮*****・
霜田　浩信******・山口　遼**・日下　虎太朗***・大伴　潔**・小林　玄****

（2020年11月25日受理）

HORIKOSHI, M., HASHIMOTO, S., SHIBASAKI, H., LEE, S., KUMAGAI, R., SHIMODA, H., YAMAGUCHI, R., KUSAKA, K., OTOMO, K. and KOBAYASHI, S.; “Reality Shock” for Classes in College Students in Teacher Training Colleges: *An Investigative Report of Freshmen College Students in First and Second Half of the Year*.　ISSN 1349-9580

The differences in students’ expectations about college studies before and after entering college are known as the “reality shock” regarding studies. We assumed that the reality shock causes the declining number of students in teacher training colleges who become educators. Therefore, we conducted a questionnaire survey in the first and the second half of the school-year of freshmen college students in a teacher training college. Results indicated that 36.6% of students experienced the reality shock in the first half of the year, and 58.2% of students experienced it in the second half because students wanted classes that were active, practical, interesting, and gave them teaching experiences. However, the actual classes were very different from their expectations, which caused reality shock. It is suggested that these findings are essential for teacher training colleges to improve their classes’ content.

KEY WORDS : College Students, Reality Shock, A course of Teachers Training

* *Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University*
** *Support Center for Special Needs Education and Clinical Practice on Education, Tokyo Gakugei University*
*** *Doctoral Course The United Graduate School of Education*
**** *Support Room for Students with Disabilities*
***** *Office for Students with Disabilities, University of Teacher Education Fukuoka*
****** *Department of Education, Gunma University*

1．はじめに

日本の大学進学率は微増傾向にあり，文部科学省（2019）[1] の調査によると大学・短大進学率は58.1%，大学（学部）進学率は53.7%と，どちらも過去最高の割合を記録している。半数以上の人が大学に進学しているが，一体何を目的として大学に進学するのだろうか。その問題については「大学進学動機」という標題のもと研究

* 東京学芸大学大学院教育学研究科
** 東京学芸大学　特別支援教育・教育臨床サポートセンター
*** 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科
**** 東京学芸大学　障がい学生支援室
***** 福岡教育大学　障害学生支援センター
****** 群馬大学教育学部

が進められており，柳井ら（1989）[2] によると，大学進学理由として「専門的知識の取得」「就職に有利な条件の取得」「広い教養を身につける」「高い学歴を身につける」「人間関係を広める」等の理由が挙げられている。これらの理由のもと大学に進学する人が多いものの，半澤（2007）[3] は「学業における高校と大学の差異によって，大学生は様々な不安や不満，違和感を覚えるということ，そしてそれが原因となって大学の相談室に来談するケースもあ」り，それは大学入学前に形成していた大学での学業に対する「イメージや期待が現実に大学で経験した学業と合致しなかった時，それが失望や違和感として現れる」と述べている。また，半澤（2004）[4] は，大学入学前に抱いていた学業へのイメージと入学後に経験した学業の間のズレのことを，学業に対するリアリティショックとした。具体的にどのようなリアリティショックがあるのかについて明らかにし大学側がこれらを把握することで，学生への支援体制の構築に繋がると考えられる。それらの支援を講じることは，大学生のリアリティショックを軽減し，大学生活への適応へとつながるだろう。

文部科学省（2020）[5] の調査によると，国立の教員養成大学・学部（教員養成課程）の2018年３月卒業者の就職状況は，全体の教員就職率（卒業者数から大学院等への進学者と保育士への就職者を除いた数を母数とした場合）は，65.7％であった。これは前年度の67.0％から減少している。学生の中には「教師になるつもりはないが資格が欲しい」，「親や親戚の影響で教員養成課程に入学したい」と考え入学した人もいるだろう。しかし，大半の学生は教師を目指して教員養成課程に入学したと考えられる。それにも関わらず，大学生活を通して約35％の人が教員以外の道へ進んでいる。この背景には一体何があるのだろうか。教育実習やアルバイト，ボランティア等で子どもと実際に関わるうちに教員を志望する気持ちに変化が生じたということも考え得るし，他に魅力的な職が見つかったためという者もいるだろう。しかし，教員以外の道を志望するに至った理由の１つとしてリアリティショックも挙げられるのではないだろうか。入学前に抱いていた教育や教職に対するイメージとの差異に戸惑い，他の道に進むことを決めた者もいると考えられる。したがって，リアリティショックを軽減することは教員志望者の増加につながるだろう。さらに，リアリティショックに関する問題は教員非志望者だけでなく，教員志望者にも深く関わる問題である。教員養成開発連携機構が2016年に東京学芸大学の学部３年生に実施した教員養成課程の学生の悩みに関して教員志望者・非志望者を比較した調査によると，「授業に興味・関心がわかない」という質問に「そう思うこと」が「よくある」＋「ときどきある」と回答した者の割合は，教員非志望者が66.4％で教員志望者が55.7％であった。教員非志望者にとって授業に関心がわかないということはまだ理解の余地があるが，教員を志望している者の半数以上が授業に興味・関心がわかないと回答していることは特筆すべき点である。授業に興味・関心がわかないということは，自身がイメージしていた教員養成の授業と実際の授業の間に落差があると捉えられるが，この点から大学教員が学生のニーズに合った授業をできていない可能性が示唆される。通常，授業は学生の意欲と授業者の授業方法や工夫の両方があって初めて充実した授業が展開される。しかし，教員養成課程における授業は教員免許取得のために義務として受講しなければならない授業であるためか，学生にとって学ぶ意欲がわかないと感じる授業は少なからずあるだろう。また，学生は実践的な授業や教授自身の体験談等を含んだ「面白い」授業を求めているにも関わらず，教員側がそのニーズに応えきれていない可能性もある。したがって，それらを明らかにすることは，教員非志望者を減らすだけでなく教員志望者の質の向上等にもつながり得る。

以上のことから，教員養成系の学部に所属している１年生を対象にリアリティショックに関する調査を行い，教員を志望している／していた学生がどのようなリアリティショックを受けているかについて明らかにすることを本研究の目的とした。

２．方法

２．１　対象

前期調査：A国立大学教育学部及びB国立大学教育学部１年生

後期調査：A国立大学教育学部及びC国立大学教育学部１年生

２．２　手続き

前期調査は201X年５月頃，後期調査は201X年11月頃に質問紙を配布し，無記名で回答を依頼した。回答は任意であることや調査結果は統計的に処理され個人が特定されることはないこと，データ分析後は責任をもって調査用紙を廃棄することを説明し，質問紙への回答をもって同意とみなした。

質問紙は前期調査322名（回収率98.4％），後期調査614名（回収率97.6％）から回収した。

２．３　調査内容

質問紙の主な調査項目は以下の通りである。

(1) 回答者の特性：学年，専攻・学科など

⑵ 現在志望している進路
⑶ 大学入学前の大学に対するイメージに関する質問8項目
①立派な教員になるための知識・技能が身に付くと思っていた
②子供とたくさん触れ合うと思っていた
③実践的な学びができると思っていた
④教育について真面目に議論する機会が多いと思っていた
⑤熱心な仲間に出会うことができると思っていた
⑥教育業界のポジティブな面を知ることができると思っていた
⑦現場経験の豊富な教授に教えてもらえると思っていた
⑧面白くて興味深い授業が受けられると思っていた
⑷ 大学入学後の大学に対するイメージに関する質問8項目（上記の入学前の質問項目の逆転項目）
①立派な教員になるための知識・技能が十分に身に付かない
②子どもと触れ合う機会が少ない
③実践的な学びのできる授業が少ない
④教育について真面目に議論をする機会が少ない
⑤他の学生があまり熱心でない
⑥教育業界のネガティブな面を見せられる
⑦現場経験のない大学教員が多い
⑧つまらない授業が多い

３．結果

３．１　現在志望している進路

調査時点で志望している進路について尋ねた。その結果，前期調査（図１）においては79.0％の学生が教師を志望しており，後期調査（図２）においては85.0％の学生が教員を志望していることが明らかになった。

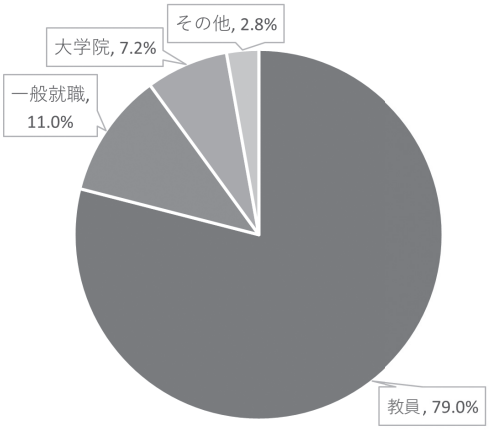

図１　【前期】現在志望している進路（N=319）

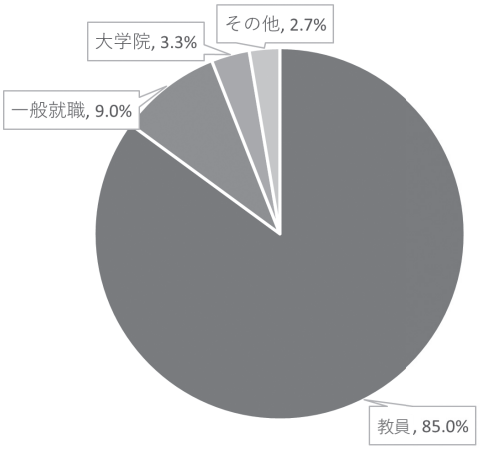

図２　【後期】現在志望している進路（N=602）

３．２　リアリティショックを感じている学生の割合

⑴「立派な教員になるための知識，技能が身につく」というイメージに対するリアリティショック

入学前に「立派な教員になるための知識，技能が身に付く」と考えていたかについて「とても当てはまる」を５とし，５件法で回答を求めた。さらに，その質問内容の逆転項目として，入学後に「立派な教員になるための知識・技能が十分に身に付かない」と感じたかどうかについて「とても当てはまる」を５とし，５件法で回答を求めて分析の際に逆転処理をした。そして，入学後の得点から入学前の得点を引いた差が図３と図４の数値である。

分析の結果，前期調査（図３）においては5.9％の学生が入学前後の差が−４及び−３であり，46.9％の学生が−２及び−１であった。したがって，「立派な教員になるための知識・技能が身に付く」というイメージに対し5.9％の学生が強くリアリティショックを感じており，46.9％の学生がややリアリティショックを感じているということが明らかになった。一方，後期調査（図４）においては14.4％の学生が入学前後の差が−４及び−３で「立派な教員になるための知識・技能が身に付く」というイメージに対し強くリアリティショックを感じており，51.3％の学生が−２及び−１でリアリティショックをやや感じていた。

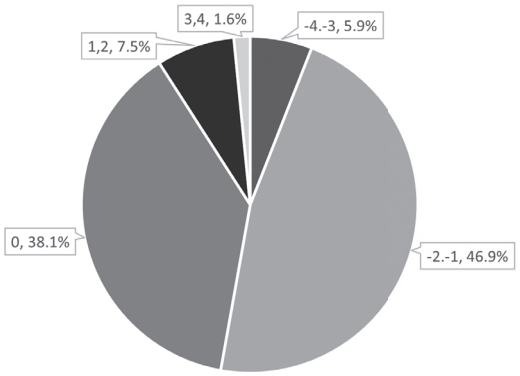

図３　【前期】「立派な教員になるための知識・技能が身に付く」というイメージに対するリアリティショック（N=320）

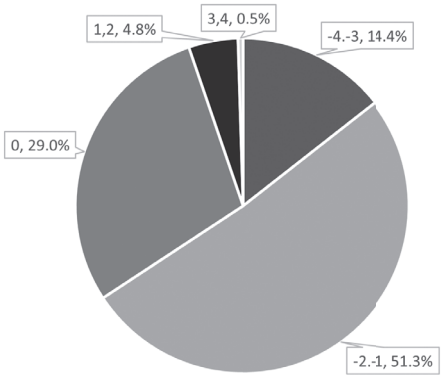

図４　【後期】「「立派な教員になるための知識・技能が身に付く」というイメージに対するリアリティショック（N=610）

(2) リアリティショックを感じている学生の割合

上記の「2. 3　調査内容」に記載した「4. 大学入学後の大学に対するイメージに関する質問８項目」と「3. 大学入学前の大学に対するイメージに関する質問８項目」各々に対し「とても当てはまる」を５とし５件法で回答を求め，逆転処理を行った入学後の回答の合計得点から入学前の回答の合計得点を引いた差が，図５と図６の数値である。質問は全8項目あることから，入学前後の差が−８以下だったものをリアリティショックを感じた学生とした。その結果，前期調査（図５）においては36.6%の学生がリアリティショックを感じており，後期調査（図６）においては58.2%の学生がリアリティショックを感じていたことが明らかになった。

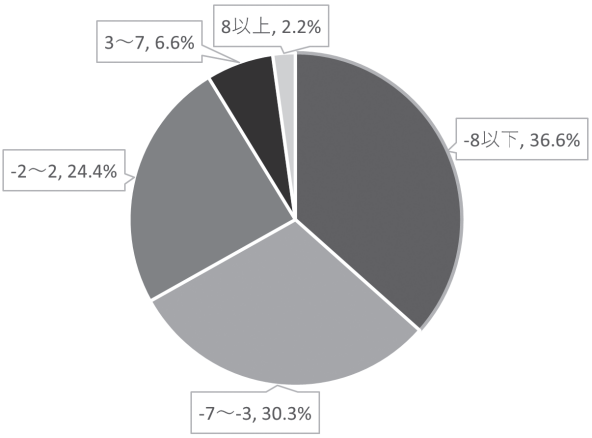

図５　【前期】リアリティショックを感じている人の割合（N=320）

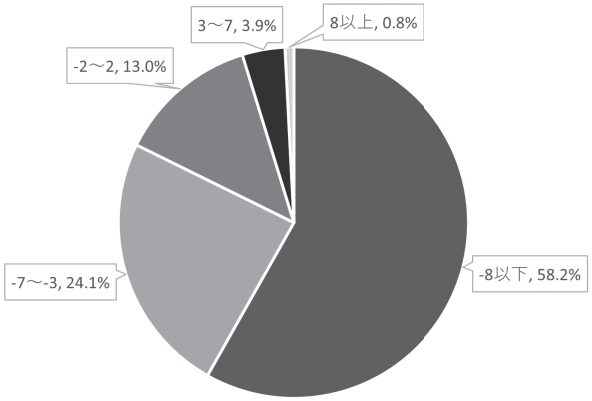

図６　【後期】リアリティショックを感じている人の割合（N=610）

４．考察

４．１　現在志望している進路

前期調査では79.0%，後期調査では85.0%の学生が教員を志望している。このことから，大学１年生の段階でリアリティショックを受けて教員以外の道へ進むことを決めた学生，または入学以前から教員以外の道を考えていた学生は15 〜 20%いることが分かる。文部科学省（2020）[5] の調査より国立の教員養成大学・学部（教員養成課程）の2018年３月卒業者の教員就職率は65.7%であることから，教員以外の道へ進んだ学生の大半は大学１年生の段階で既に教職以外への就職を考えていたと言える。大学入学以前から教員になるつもりがなかった学生も勿論いるはずだが，多くの学生は教職に就きたいという気持ちがあって教員養成課程へ入学したということを鑑みると，リアリティショックを受けたことで教職を諦

めた学生は一定数いると考えられる。今後は，大学入学以前から教職以外に就こうと考えていた学生について調査し，リアリティショックを受けたことによって教員を諦めた学生がどのくらいいるのかについても調査していきたい。

４．２「立派な教員になるための知識・技能が身に付く」というイメージに対するリアリティショック

本質問項目は教員養成課程の学生のリアリティショックを最も的確に表している質問内容であると判断し，本質問項目のみ単独で分析した。その結果，リアリティショックを強く感じた学生とやや感じた学生を合わせると，前期調査では52.8％の学生が，後期調査では65.7％の学生がリアリティショックを感じていることが分かった。半数以上の学生が，入学後すぐに「立派な教員になるための知識・技能が身に付く」という期待を裏切られたと感じているということは注目に値する問題である。その原因の１つとして，大学1年生は教養系の授業や概論的な授業が多いことが考えられる。教職に関する専門的なことが学べると思い入学したにも関わらず，一見教育とは関係がない授業内容や，概論的な知識を詰め込む授業を受けた場合にリアリティショックを受ける可能性は十分にある。したがって，大学教員はこの点を踏まえ，学生のニーズに合った詰め込み型ではない，教育について今後学んでいく動機づけにつながるような授業となるよう工夫することが求められるだろう。

４．３　リアリティショックを感じている学生の割合

全8項目を総合的に見てリアリティショックを感じている学生の割合について調査したところ，前期調査では36.6％の学生が，後期調査では58.2％の学生がリアリティショックを感じているということが分かった。後期調査では約６割の学生がリアリティショックを感じているということは特筆すべき点である。後期調査は前期の授業を受講し終えた学生が対象となっているため，前期の授業を受講した結果，期待と異なっていたと感じているのである。この原因を質問内容から考えると，実践的な学びの少なさや教育について議論をする機会の少なさ，授業のつまらなさ等が考えられる。さらに，教員養成開発連携機構（2016）[6] が東京学芸大学の教員養成課程の学部３年生に行った調査において「授業に興味・関心がわかない」という質問に「そう思うこと」が「よくある」+「ときどきある」と回答した者の割合が教員志望者と非教員志望者ともに約６割いるということも踏まえて考察すると，学部３年生だけでなく学部１年生の段階から授業に興味・関心がわかないと感じている学生が少なからずいると考えられる。半数以上の学生が１年生のときから大学の授業への期待を裏切られたと感じているということについて大学教員は十分に理解し，対応する必要があるだろう。また，本調査は前期調査と後期調査で調査対象が異なるため，前期から後期にかけてリアリティショックを感じている学生の割合が増加したと一概には言えない。しかし，前期調査で36.6％，後期調査で58.2％の学生がリアリティショックを感じているということを考慮すると，前期から後期にかけてリアリティショックを感じている学生が増加しているという可能性は十分に考え得る。したがって，今後はその可能性を考慮して追跡調査を行い，前期から後期にかけての変化についても調査する必要があると考えている。

文献

1）文部科学省　総合教育政策局調査企画課：令和元年度学校基本調査（速報値）の公表について，文部科学省，2019-08-08.
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/__icsFiles/afieldfile/2019/08/08/1419592_1.pdf
（参照：2020/11/16）

2）柳井晴夫・清水留三郎・前川眞一・鈴木規夫：進路指導と大学情報に関する調査結果の分析，大学入試センター研究紀要，18，pp.1－71，1989.

3）半澤礼之：大学生における「学業に対するリアリティショック」尺度の作成，キャリア教育研究，25，pp.15－24，2007.

4）半澤礼之：学生の学業環境に対する適応（2）―新入生は学業に対する不満・問題にどのように対処しているのか―，日本教育心理学会第46 回総会発表論文集，483，2004.

5）文部科学省　総合教育政策局教育人材政策課：国立の教員養成大学・学部及び国私立の教職大学院の平成31年3月卒業者及び修了者の就職状況等のポイント，文部科学省，2020－08－17.
https://www.mext.go.jp/content/20191223-mxt_kyoikujinzai02-000003355_1.pdf
（参照：2020/11/16）

6）教員養成開発連携機構　東京学芸大学教員養成開発連携センター　IR部門 特命助教 早坂めぐみ：教員養成系大学における学生の意識と指導の課題，文部科学省国立大学改革強化推進補助金事業　大学間連携による教員養成の高度化支援システムの構築

―教員養成ルネッサンス・HATOプロジェクト―教員養成ならではの教職員PD講座（第２講）
http://www.u-gakugei.ac.jp/~tcenter/project/PD/data/text/pd02_r20200206.pdf　（参照：2020/11/16）